



イベント学会 2010年研究大会特集



Contents

イベント学会 2010 年研究大会	2
9月3日(金) 大阪市中央公会堂	3
開会宣言 橋爪 紳也 大会実行委員長 ・来賓挨拶 平松邦夫 大阪市長	
基調講演 堺屋太一 イベント学会会長	
シンポジウム ・大阪まち歩き ・交流パーティ	
9月4日(土) 国立民族学博物館	12
歓迎の言葉 田村克己副館長 ・特別講演 橋爪紳也 大会実行委員長	
シンポジウム ・口頭発表 ・閉会式	
事務局からのお知らせ	20

イベントが都市を創造する

2010年9月3日(金)・4日(土)の両日、イベント学会2010年研究大会を大阪にて開催いたしました。今回の大会テーマは、昨年に引き続き「イベントが都市を創造する」。3日は大阪市中心公会堂にて《BETTER EVENT BETTER CITY》をサブテーマに、4日は大阪万博40周年を記念して、万博記念公園内の国立民族学博物館を会場に《万博のあゆみと未来》のサブテーマで、講演やシンポジウム、口頭発表などを行いました。大阪での研究大会は2000年以来10年ぶりの開催で2日間の参加者はのべ500名に達し、新聞、テレビ、webの報道でも数多く取りあげられイベント学会の活動を関西エリアの皆様にも広くご紹介する大会となりました。

イベント学会 2010 年研究大会

■テーマ 「イベントが都市を創造する」

9月3日(金)

■サブテーマ: 《BETTER EVENT BETTER CITY》

■会場: 大阪市中心公会堂

■後援: 大阪市

■協力: (社)日本イベント産業振興協会 一般社団法人日本イベントプロデュース協会 日本イベント業務管理者協会

13:30~開会式「開会宣言」 橋爪紳也 大会実行委員長(イベント学会副会長)

13:35~「来賓挨拶」 平松邦夫 大阪市長

13:40~「基調講演」 ~BETTER EVENT BETTER CITY~
堺屋太一 イベント学会会長

14:40~「シンポジウム」 ~都市再発見、まち歩き型イベントの可能性~
*共催: 大阪市
モデレーター: 橋爪紳也
パネリスト: 宮本倫明 長谷川孝徳 オダギリサトシ

16:30~大阪まち歩き
「中之島界限コース」(文化とビジネス) 「北船場界限コース」(近代建築)

18:00~交流パーティ 中之島セントラルタワー3階「カフェテリア」

9月4日(土)

■サブテーマ: 《万博のあゆみと未来》

■会場: 国立民族学博物館

■協力: 国立民族学博物館、(財)千里文化財団、(独)日本万国博覧会記念機構 (社)日本イベント産業振興協会 一般社団法人日本イベントプロデュース協会 日本イベント業務管理者協会

10:00~口頭発表 研究発表者 11組

13:00~「歓迎の言葉」 国立民族学博物館副館長 田村克己

13:10~特別講演 「70年万博の遺伝子」~イベントの進歩と調和~
橋爪紳也(イベント学会副会長)

13:30~「シンポジウム」 ~EXPOの文化遺伝子ミームは今?~
モデレーター: 橋爪紳也(イベント学会副会長)
パネリスト: 吉田憲司 嘉門達夫 ヤノベケンジ

16:15~閉会式

■ 開会宣言 橋爪 紳也 大会実行委員長（イベント学会副会長）



2010年イベント学会研究大会が、10年ぶりに大阪で開催となりました。2000年の大阪大会では、2008年のオリンピック誘致、あるいは21世紀に向けたイベントの在り方などの話題で盛り上がりました。

今年のテーマは「イベントが都市を創造する」。これは昨年度に続いて、2年連続で掲げているテーマです。さらに副題として《BETTER EVENT BETTER CITY》というタイトルをつけました。これは上海万博のテーマである《BETTER CITY BETTER LIFE》、街が良くなれば暮らしも良くなるというスローガンになぞらえ、素晴らしいイベントを開催することで、我々の住む街が良くなるという想いを込めたものです。

この大会を通じて、イベントがどのような都市を創造できるのかを考えていきたいと思います。従来は、新し

い道路、鉄道、公園など、ハードをつくるために大型イベントを行うという考え方で語りがちでした。しかし、もうそれだけではない時代を迎えています。イベントには、街の新しい担い手と人々の誇りを育てる力があります。また街に新しいソフトが生まれ、新しい産業を育てるパワーがあります。これこそ都市を創造するエネルギーであると強く申し上げたいと思います。

ぜひ本日からの2日間、この大会を通じてこれからの大阪、あるいは日本の都市について一緒に考えて参りたいと思います。

■ 来賓挨拶 平松 邦夫 大阪市長



本日はイベント学会 2010 年研究大会が、中之島の中央公会堂で盛大に開かれるということで、大阪市民を代表して御礼を申し上げるとともに、ご挨拶を致したくやってきました。イベント学会の皆様方は、日頃からイベントの研究や質の高いイベントの実現を目指し、日々努力を重ねアイデアを競っておられると聞いております。そしてそれが、大阪市や全国各地の魅力発掘や発信という形で、多くの人達の生き甲斐につながっていると感じております。

私共は今、2022年のFIFAワールドカップの誘致活動を行っております。大阪市には、大阪駅の北地区に通称北ヤードと呼ばれる広大な敷地がありますが、財源は厳しい状況です。ぜひここに、8万人を超える人が観戦できる国立球技場つくって欲しいとお願いをしております。先日、5名のFIFA視察団の方々が来日しました。私も、関空まで迎えに行き、ヘリコプターに乗って北ヤードの上空を回りました。まだ貨物駅が残っていますが何もない土地をお見せしながら「1日に250万人が移動するターミナル駅に、こんなに土地が空いている都市は世界広しと言えども大阪しかありません」と説明したところ、先方にも「ミラクル」だと言っていただきました。12月2日にチューリッヒで開かれる理事会で開催地が決定しますが、1つのボールに世界中が熱狂する大イベントをこの大阪で開催し、熱い戦いを世界208の国と地域に同時配信していきたいと願っております。

大阪では、今イベントが盛況です。例えば昨年の「水都大阪2009」では100万人の予想に対し、190万人の皆様楽しんでいただきました。昨年末には、大阪府が行った御堂筋のイルミネーションと大阪市が行う中之島

地区の光のルネサンスとの相乗効果で、この中之島の西・東会場だけで300万人が訪れました。従来は134万人が最高でしたので、2倍以上の来場者となりました。大事なのは、皆様楽しんでいただくための仕掛けとアイデア、そして主催者が自信を持っておすすめできる質の高さであり、この傾向は今後ますます強く求められてくると思います。

また、大阪では大阪コミュニティツーリズムが、大変盛り上がっています。「大阪あそ歩」あるいは「大阪旅めがね」などに参加する様々な人達が、自分の街をガイドする。参加者は大阪のディープな魅力を体験できる。こうした新しい観光プログラムが大阪の街に広がっていることを、ぜひ皆様にも知っていただきたいと思います。

イベントを通じて本当の価値を発信していくことが、まさしくイベント学会が目指していく《BETTER EVENT BETTER CITY》であろうと思っております。この大会を通じて素晴らしい方向性を導き出し、多くの市民、日本国民が世界に向けて「日本はええとこでっせ」と発信していただけることを心からお願いしまして、大阪市長としての歓迎のご挨拶とさせていただきます。



~BETTER EVENT BETTER CITY~

堺屋 太一 イベント学会会長



「技術と珍品」「芸術」「人間」の時代を経た万国博覧会

今年は上海で、人類史上最大の万国博覧会が開かれております。入場者数は昨日(9月2日)までに、5000万人※を超えております。

上海万国博覧会は、一つの新しい時代をつくりました。万国博覧会は4つの段階に分けられますが、第1の段階が1851年のロンドンで始まる19世紀型の博覧会で「技術と珍品の博覧会」と言われました。新しい技術、世界の珍しいものを見せることが主たる目的でしたが、ラジオやニュース映画などが登場すると、世界中に珍しいものがなくなり「万国博覧会は終わった」という議論が盛んになりました。

それを復活させたのが、1925年にパリで行われた「芸術の博覧会」です。有名な芸術家が次々と現われ、アールデコのデザインが登場し、都市計画というものも広がりました。無窓建築という窓のない建築、エアコンディション、蛍光灯照明というような、新しい生活環境が提示されました。しかし、第二次世界大戦の影響から「芸術の博覧会」は思想がかったものになっていきます。ピカソのゲルニカはその象徴的な作品でした。

次に登場したのが、モンリオールと大阪の万国博覧会。私達は「人間の博覧会」を提唱し、人間を見ることが大事であるという博覧会を考えました。大屋根とお祭り広場をつくり、そこに集まる人達を見ることが一番の楽しみになりました。「人間の博覧会」の特長は、固有名詞、有名な作家や芸術家が登場することです。大阪でも、建築、照明、デザイン、ファッションのデザイナーの分野でも有名な人が数十人登場しました。この傾向はしばらく続き、1992年のセビリア万国博覧会は非常に成功し、人口84万人の都市に5400万人が訪れる盛況ぶりでした。

しかし、2000年代に入ると「人間の博覧会」の発想が衰え始め、名古屋では環境がテーマとなり、固有名詞は表に出さなくなりました。環境のためには、人間活動は小さい方がいい。従って、愛知万国博覧会から有名になった固有名詞はあまりご存知ないと思います。入場者のほとんどが中部3県の人に集中したローカル博覧会になりました。

イベントの本質を追究した上海万国博覧会

さて、上海万国博覧会は今から26年前の1984年に、

私が当時の上海市長の汪道涵にお話したことから始まります。最初はやはり技術と珍品の発想で、世界から先進技術を取り入れ中国の発展に役立てたいと99年の建国50周年に開く計画でした。これが天安門事件で中止となり、次に90年代中頃から朱鎔基市長、後の中国首相の下に第2次編成が行われました。私共アジアクラブが全面協力をして、まとめあげたのが2002年プランで、これは「BETTER CITY BETTER LIFE」の発想で、中国の近代工業化した姿を世界に見せるというものです。それまでは、各国のパビリオンを恒久的に活用する計画でしたが、新たなプランでは博覧会文化の持つ「聖なる一回性」で、壊すことを前提にしてこそ大胆なイメージができるという方向性になりました。内容については、延々と議論を積み重ねましたが、結局イベントとは何かという本質論に辿り着き、「非日常的な環境をつくることによって、通常ではあり得ない情報を人々に広げる瞬間である」ということになりました。そして、普通なら採算面から実現できないことを、万国博覧会というイベント性によって、国や企業がお金を出しても損ではないと思わせること。そこが大事なことでございます。

上海のキーワードは「バーチャル」

このイベントの本質を研究した結果、上海万国博覧会是一言で表すと「バーチャル」(夢を実現して見せる行事)です。「技術と珍品」「芸術」「人間」の時代を経て「バーチャル博覧会」が登場しました。見たことのないもの、できると思わなかったものが次々とできている。例えば、中国館には宋時代の中国の都(汴京)を描いた仇英という人の巻物を映像化したものがあります。高さ7メートル弱、幅が130メートルほどのスクリーンに巻物がそのまま表現され、そこに描かれている1000人を上回る人々が全員動きます。宴会で踊っている人、荷物を運んでいる人、船を漕いでいる人、あらゆる場面で人物が動いている。これには圧倒され、日本の映像技術の遅れを感じざるを得ません。

また、広大な博覧会場の敷地を走るクルマは全部電気自動車です。路線バス、貸切バス、タクシー、バトロールカー、ゴミ収集車、救急車もすべて電気自動車です。日本では電気自動車をガソリン自動車と同じ発想で開発しようと考えましたが、上海は電気自動車に合った都市システムをつくろうと考えました。1回の充電で走るのは80キロ。乗り合いバ

スは停留所でパンタグラフが上がって充電をする。バスの電池は従来の1/3と軽量化したことで効率が良くなった。約2千数百台の電気自動車走っている。これもまさに驚きです。

そしてLED画面にも圧倒されます。日本のLED画面は、だいたい7メートル×10メートル程度のものが最大ですが、20メートル四方のものが各所にあります。

私達も26年間かけてこの行事を実現しましたので、日本の民間パビリオンとして日本産業館を出展いたしました。日本産業館ではオリジナルの袋を入場者全員に渡しています。パンフレットも差し上げています。運営面でも非常に余裕があることで、屈指の人気館となりました。日本政府館は税金と寄付金の130億円を投じましたが、日本産業館は1円も税金をいただかず、広告・宣伝効果を期待する各企業のご納得によって運営しています。それだけに、確実に黒字にしなければいけない。厳しい条件でしたが、来場者アンケートでは感激度で必ず5番目に入ります。全体の入場者が多いので多くの館で長蛇の列ですが、来場者の満足度の高さと、経済的に黒字という点でも大変成功だと思います。それは、驚きの発想、驚きの博覧会の考え方をいち早く取り入れたからです。このことは、現在の日本の問題点を物語っています。

税金頼みの発想が日本を危機的状況に

ご存知のように日本経済は危険な状態で、もの凄い勢いで衰退しています。これはかつての大阪と同じです。大阪がなぜ衰退したのか？それは、情報を発信するような人、大企業の本社、研究者や文化人など、所得のトップクラスの人がいなくなり、所得の高い人と低い人のバランスが崩れて税金を払う人がいなくなった。貰う人ばかりになった。これが大きな問題であり、日本は同じ状況に直面しています。東京から本社機能が流出し、研究者や技術者、経営者、芸術家やスポーツ選手も次々に外国に行ってしまう。この状況の根源になっているのは、国や市がお金を出すことを前提にした、発想にあると思います。

大阪では、FIFAワールドカップを誘致していますが、北ヤードに8万人のスタジアムを建設して採算が合うのか。ここが一番大事な点です。6年前に私が提唱したのは、サッカー場の周囲に40階程のビルやマンションを建て、土地取得の費用に充当する。スタジアムは6階あたりに建設して、1階から5階はショッピングセンターと駐車場にする。このような有効活用をしなければ、実現は難しいと思います。近頃の日本の良くないところは、国に頼りきって、夢のようなものを忘れてしまっていることが多いと感じます。

今必要なのは2000万人クラスの大規模イベント

大阪を活性化するためには、やはり最低でも花博のような2000万人を動員するイベントが必要です。ところが、全国ニュースにならないローカル行事で満足している。日本全体が同じ状態です。大阪にはサプライズが必要で、非日常的な環境の元に、サプライズを起さなければいけない。上海万国博覧会に続いて、再来年は韓国の麗水で小さい博覧会

があります。この日韓中の3カ国が持ち回りでアジア博覧会をやろうという話があります。大阪も4年後に検討してはどうでしょうか。その時に大事なことは、税金に頼らない。必ず採算の合うものにしなければならない。日本万国博覧会は、6422万人の人を集めて292億円の黒字を残しました。当時は国の予算が3兆円、来年度予算は94兆円ですので約30倍になっています。その割合で考えると、9000億円ぐらい利益が出た計算になります。そういった大規模な計画を考えなければいけない。それを可能にするのが、特殊な非日常的な情報環境であり、これから益々重要になるイベントのポイントだと思います。ぜひ諦めムードの日本を改革するような、ダイナミックな行事を考えていただきたいと思います。

知的好奇心で新たな知恵づくりを！

大阪が再び世界都市になれるか、日本が本当に先進国として踏みとどまれるか、これからの10年に全てがかかっています。そのためには、皆様に知的好奇心を沸かしていただきたい。中国の人は、日本産業館に入るのに4時間くらいは並んでいます。やはり知的好奇心があるんですね。日本の人は、4時間も並ぶなら帰ってしまいます。幸い日本産業館が黒字になりましたので、私も成功のための公式をつくりたいと思っております。これを広める使命を持った説得者、布教者のような方が、皆様の中から生まれることを期待しております。それができれば、皆様方の子孫の時代も、繁栄を続けることができるでしょう。今のままでは、日本に対する注目度は落ちる一方です。アジア諸国での日本の評価も劇的に下がってしまいました。それは、日本から新しいもの、好奇心の対象になるものが生まれて来ないからです。この状況を何とか変えなければならぬ。

そこで必要なのは、やはり知恵づくりです。知恵づくりの元は知的好奇心です。知的好奇心を生み出すようなイベントが、これからの日本の国家を左右する。皆様方も、ぜひ国の未来を担うつもりで、イベントに取り組んでいただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

※累計入場者数7308万人(2010年10月31日)



PROFILE

堺屋 太一 (さかいや たいち)
イベント学会会長

1935年大阪生まれ。東京大学経済学部卒業(1960年)後、通商産業省入省。日本万国博覧会を担当。沖縄開発庁に出向中は沖縄海洋博や観光開発を手掛けた。1962年通商白書では「水平分業論」を展開し、世界的に注目される。1978年に退官。作家として予測小説手法を開発、「油断!」「団塊の世代」「平成三十年」などのベストセラー小説のほか歴史小説「巨いなる企て」「峠の群像」「豊臣秀長」「世界を創った男チンギス・ハン」を執筆。また、1985年に出版した経済理論「知価革命」は世界8カ国語に訳され、90年代の世界を予言した書として国際的評価を得ている。(財)アジアクラブ理事長、国会等移転審議委員会、政府税制調査会委員などを歴任。1998年7月より2000年12月まで経済企画庁長官を務める。2010年、上海万国博覧会日本産業館代表兼総合プロデューサーを務める。

■■■ シンポジウム ■■■

～都市再発見、まち歩き型イベントの可能性～



モデレーター

橋爪 紳也 イベント学会副会長

パネリスト

宮本 倫明 地域経済プロデューサー

長谷川 孝徳 「かなざわ・まち博」推進者&研究者
北陸大学 未来創造学部教授

オダギリ サトシ 「大阪旅めがね」プロデューサー

橋爪 近年の傾向として、従来の囲い込み型の手法ではなく、街全体に賑わいをもたらすイベントが各地で行われています。今日はパネリストの皆さんに、その事例をご紹介いただきながら、我々が目指すべき道を議論して参りたいと思います。今日は全国から大阪にお運びいただいているので、まず私から大阪のイベントの状況についてご報告します。

街全体を会場にした 近年の地域イベントの意義

私は大阪で、様々な事業やイベント等のプロデュースをしております。昨年の「水都大阪2009」は、中之島エリアの公園整備や鉄道の新線開通を記念するべく実施した事業です。最初は、150億円規模の大規模イベントが検討されましたが、9億円規模の予算で、公園などを中心としたイベントを展開いたしました。このイベントの狙いの一つは、水の都という大阪のブランドを再創造すること。大正から昭和初期の大阪は、東洋のベネチアと呼ばれる大都市でした。美しい水際の産業都市として、世界に冠たるものだったと思います。当時の心意気やプライドを、今の大阪に回復したいという願いを込めて展開いたしました。

この公会堂でも、子供たち向けのワークショップを数十回行い、未来の大阪の夢を描きました。周囲の公園も見違えるほどキレイになりました。集客効果を上げるために、アーティストのヤノベケンジさんに「ラッキードラゴン」という竜の船をつくっていただき盛り上げました。高さ9メートル、横11メートルの巨大なアヒルを天満橋の川に浮かべ、子供たちに大人気でした。ここで大切なのは、アヒルや竜の船ではなく、子供たちが大阪の都心部に来て、美しくなった川沿いを見て、この界隈がとても魅力的な場所だと知ること。この記憶は おそらく一生忘れない。生涯忘れない感動を子供たちに提供する

ことです。そのために、こうした地域イベントは大切であると改めて実感しました。

「水都大阪2009」を契機に 都市のブランドと市民の誇りを創造

川沿いの景観整備のために、河川法の準則緩和をし、民間の方が店舗を張り出せるようにしました。これが川沿いに並ぶと、ヨーロッパのような景観ができる。大阪の新しい風景です。陸と川が親密な関係だった、かつての大阪の魅力を現代的に蘇らせたいと考えています。また、橋下知事は橋梁や堤防のライトアップに力を入れ、川全体を光の名所にする事業を昨年から展開しています。このようにイベントを契機にしたまちづくりを川沿いから広げていきたいという想いから、現在次の10年のビジョンを描いています。水辺に光の名所を創造していく。「水の都・光の都大阪」を目指す。それによって大阪のブランドを高め、市民の誇りを創造していく計画です。

我が街を知り我が街を育てる 「コミュニティ・ツーリズム」

もう一つの柱として取り組んでいるのが「コミュニティ・ツーリズム」です。地域の方が観光ガイドをする方法論を展開するために、2年前から「大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会」を組織しました。いくつかの計画の中で、既の実績をあげているのが、まち歩きです。後ほど、オダギリさんから話がございしますが、「水都大阪2009」を機に「大阪旅めがね」を事業化し、新しいまち歩きの商品化を始めております。

このように、地域の魅力を再発見し、地域全体をミュージアムとする。その魅力を高める手段として、まち歩き型の様々なイベント等を展開するという事例を、大阪ではつくり始めたところでございます。今日はパネリストの皆さんから各地の事例をご紹介いただきながら、地域を



宮本 倫明 (みやもと りんめい)

地域経済プロデューサー
イベント学会理事

Panelist

山口県防府市出身。大阪大学工学部発酵工学科卒。
地域経済プロデューサーとして「うつくしま未来博」(福島県)などの地方の
大型イベントのプロデューサーを務める。「えひめ町並み博2004」(愛媛県)
では、「日本イベント大賞」「PRアワードグランプリ」などを受賞。地域ブ
ランディングプロデューサーとしても評価を受ける。イベントを活用した社会
起業誘発など社会変革が専門。現在、2009年から2014年の6年間にわ
たり、伊勢神宮 ご遷宮を契機とする地域づくりの全県的運動、「美(うま)
し 国おこし・三重」の基本計画、実施計画、総合プロデュースを進行中。
(有)Landa Associates (旧社名メディアマーケット)代表取締役。

盛り上げる方法論を学んでいきたいと思います。

潜在的な観光資源を磨いて実施した 「えひめ町並み博」

宮本 愛媛県の観光振興を目的に実施した「えひめ町並み博」の事例を紹介します。このイベントの狙いは、地域の観光ブランドをつくり、地域を改革すること。ブランドはつくるだけでなく、継続して多くの人に知ってもらわなければならない。つまり、非日常であるイベントを継続させるという、随分矛盾したことを考えなければいけない。そのために4つの方式を考えました。

1つ目は「パビリオンのない博覧会」というコンセプトですが、実はパビリオンをつくる予算が無かったんですね(笑)。町並みというハードを活かし、そこに暮らしている人々に投資をして何かを生みだそうと考えました。

2つ目は、パビリオンが無いなら何を見せるのか。それを、住民の方々の普段着の活動や昔からの営みをうまく応用して、外から来たお客様に面白いと感じていただこうと考えました。その手法として座談会というアプローチを行いました。2年間で延べ56回、823人が参加して「地域の資源にはこういうものがある」「昔はこうだった」「こんなことだったらできそう」と、住民が自発的・創発的に考える。何回も繰り返すことで次第にアイデアが出てきて、グループをつくる。そこに専門家を入れて、個別の支援をしていきました。要するに、予算を投じる対象を、住民のグループに絞り込んだわけです。彼らが元気になれば町が元気になる。彼らが儲かればそれが続く。非常にシンプルな原理です。

地域の旅行エージェントを立ち上げ 事業の継続化と成長を後押し

当時は83グループが、思い思いのサービスを行いました。例えば内子町というエリアでは、若者たちがレトロバスを走らせる計画をしました。プログラムに対しては、初期投資に限り、ある程度の助成金が出ます。助成金と自分たちが1人10万円ずつ出し合い、レトロバスを買いました。今では、NPO法人化してバスも3台になり、観光プログラムとして継続しています。

3つ目の方針は「広域長期・同時多催」。愛媛県の半分くらいの地域を対象に、まず半年間実施し、「同時多催」で色々なことを一度に立ち上げたのが「えひめ町並み博」です。

最終の方針は「継続する仕組みのデザイン」で、地域密着型エージェントを翌年の2005年に立ち上げました。これは、経済産業省の受託事業に応募して地域の人たちが始めた旅行エージェントです。地域の集客資源をマネジメントして、外の人を連れてくる流れを開始しました。

この「えひめ町並み博」もそうですが、今「経験」ということが重要なキーワードになっています。人にエクスペリエンスを提供するサービス業が伸びている。満足する体験を提供することで、時間もお金も使ってもらえる特殊な領域ですが、これを活かしたプログラム開発や商品開発には、非常に可能性があると感じています。

ドーナツ化現象の活性化を目指した 「かなざわ・まち博」

長谷川 「かなざわ・まち博」は、1999年からプレスタートし、2000年から本格化した地域イベントで、今年は11回目を開催しました。毎年、7月の最終週の日曜日から8月末の約1ヵ月間、「まちに出る、まちを知る、まちで遊ぶ」を大きなテーマに開催しています。金沢も大都市と同じくドーナツ化現象が進み、中心市街地の人口が激減しました。高齢化した中心市街地活性化事業の一環として、当時の通産省の補助金でスタートしました。

「かなざわ・まち博」は、まず昔の金沢城下町エリアを対象に、当時の連区割りに従って10のエリアに分け、それを「寺町パビリオン」「東山パビリオン」という名称にして、それぞれの特性を際立たせていきました。2000年には「まち博スポット」として2000ヵ所選び点在する商店街を回遊させる仕組みをつくり、これをベースに様々な活動を展開してきました。11年間、「屋台大学」「手仕事大学」「金沢散歩学」「限定公開」「料亭体験」「茶屋体験」「子供まち博」などを実施しています。

その他、「まち博教科書」は金沢市内の小学校4年生全員に配付したもので、「我が町ふるさと」という社会科の授業の教材に使用してもらっています。

「三文豪バス」は、観光地を結ぶ循環型のバスで、15分





長谷川 孝徳 (はせがわ たかのり)
北陸大学 未来創造学部教授

Panelist

1955年 大阪府生まれ。

1979年 皇學館大学文学部卒業。同年4月より石川県立能楽文化会館(現・県立能楽堂)、1981年より石川県立郷土資料館、1986年より石川県立歴史博物館勤務を経て、2007年より北陸大学未来創造学部教授、2008年より現職。2009年10月よりNHKラジオ第2放送「カルチャーラジオ」講座にて「武将たちの美意識」を担当。この間、海外派遣芸員、「かなざわ・まち博」パビリオン選定委員をはじめ各種委員などを歴任。現在、石川県立看護大学非常勤講師、国土交通省手取川水系流域懇談会委員、石川県人権教育推進委員長、石川県文化財保護指導員、小矢部市文化財保護審査委員、高岡市立博物館整備構想委員、藩老本多蔵品館学芸展示指導員、富山県神社庁協議員、同教化委員を務める。

主な編著書などに、「博物館・美術館における今後の防虫防菌対策」(財団文化財虫害研究所(2006年))、「地域の文化資源考」都市環境マネジメント研究所『学都』(2008年～2009年連載)他。

間隔で運行しています。室生犀星、泉鏡花、徳田秋聲の、金沢出身の三文豪の名前をとって3台のバスを用意しましたが、好評のため現在はもう1台増えています。キャラクターは、「みまっしちゃん」「きまっしくん」。金沢・前田家の梅鉢と、「みまっし」=見てください、「きまっし」=来てください、という方言のネーミングですが、あまりウケないようで…(笑)。おもてなしをするボランティアガイドは「まいどさん」と呼んでおります。当初はイベント期間中だけ7箇所にインフォメーションセンターを設置しましたが、現在は長町の武家屋敷館と東茶屋館の2カ所を常設にして、年間を通じてサービスしております。

継続化の原動力は イベントに関わる人の好循環

以上が概要ですが、実は5～6年目に「もう止めようか」「マンネリ化した」という声もありました。しかし、それを何とか継続できた大きな要因は、人の循環です。金沢は転勤族が多いのですが、こうした企業の人に参加していただくと、次の勤務地で「金沢はこうだった」と広報活動をしてくれるんです。夏休みの時に、誰かを連れて来てくださる方も少なくない。また、回を重ねるごとに小学生のときに参加したお子さんが大学生になってボランティア参加してくれる、あるいは以前は仕事が忙しかった人がリタイアしたから協力したいと、新たな参加者も増えています。これは、11年間継続した成果の一つだと実感しています。

大阪を再発見する着地型観光 「大阪旅めがね」

オダギリ 私たちは“大阪がクセになる新感覚の大阪ツアー「大阪旅めがね」”を運営しています。どこが新感覚なのか?まず、従来の大阪のツアーを考えてみてください。皆さんの頭の中で「大阪と言えばアレやな」と思い浮かべると、だいたい、たこ焼き、タイガース、吉

本新喜劇、道頓堀ではないでしょうか。私も以前から、多くの人が画一的なイメージを持っていると感じていました。その理由としては、従来は発地型の旅が多かった。それを着地型に変えたい。旅行者自らが街を回って、今まで知らなかった大阪の魅力を感じて欲しい。今のままでは、将来は駄目になると悩んでいるときに「水都大阪2009」の情報をキャッチしました。基本コンセプトに「市民が主役」「元気で美しい大阪づくり」というキーワードを見つけ、新しい大阪の魅力、もう一つの旅をプロデュースできるチャンスだと考えました。

これを機に、40名程の市民の方が集まり始めました。コースづくりの前のプレストを前半は会議室、後半は酒場で30回以上繰り返しました。コース案の概要が決まったところで、案内人を募集したところ約200名の応募がありました。ボランティアガイドではなくプロのガイドとして案内するために、添乗員の資格も取得しました。当然、座学に加えて現場研修も重ねました。

こうして、約60名のエリアクルー(案内人)と約20名のエリアコーディネーター、そして約100名の地域の協力者を得て「大阪旅めがね」が誕生しました。「水都大阪2009」の期間からスタートして、現在は毎週土日にツアーを実施しています。コースは定番の14エリアと単発のツアーなどもあり、約2時間で3,480円から高級な食事付きのものは約13,000円。“売り”は名所や穴場のご案内、そして個性豊かなエリアクルーです。地元の名物の人、例えば鶴橋のキムチをつくるオモニとの交流も人気です。「大阪旅めがね」の狙いは、地域の暮らしに根差した魅力の発信と、大阪人自らが街を楽しんで郷土愛を育くむことです。そして新しい産業になり、地域にお金を落としながら地域を元気にすることが大きな目的です。

自立継続～成長によって 地域を元気にする新たな産業に

最も重要なのは、我々は民間企業ですので、自立継続した運営が一番の肝になっています。まだ立ち上げたばかりの細々とした企業ですので、「コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会」や商工会議所からもサポートを受けながら、自立継続を目指しております。現在は1年半程経過しましたが、何とか事業として継続しています。「水都大阪2009」終了後にお客様が集まるかどうか不安もありましたが、参加者も順調に増えファンクラブ入会者も拡大中です。参加者は40代女性を中心。市内、府内、府外の比率は、ほぼ同じくらいです。今ではキャンセル待ちが出るコースもあり、嬉しいばかりです。まだ安定したと断言はできませんが、自立継続に向け、鉄道会社、マスコミ、飲料メーカー、飲食店などとコラボをしながら



ら積極的に展開しています。この冬には修学旅行の受注も決まり、事業として軌道に乗ってきたところです。

“都市を創造する”イベントとは

橋爪 オダギリさんは「水都大阪2009」を契機に、新たに会社を創業してこの活動のために独立した。その想いはみんなに伝わっているので頑張ってください。では、引き続き意見交換等に入りたいと思います。

長谷川 どこの活動も基本は同じですね。地域の文化資源などを、いかに上手に活用するかに尽きると思います。今まで見過ごしていたことを、再発見することが大事ですね。金沢でもそうですが、住民が地域のことをまったく知らない。大阪でも同じではないでしょうか。自分たちが歩いて発見して自分の街を知れば、今度は外の人にその良さを話すことができる。それが広がっていく。どこの地域でも同じことが言えると思います。

橋爪 堺屋先生は、先程の講演で「聖なる一回性」だからこそ特別なことができるとおっしゃいました。経験産業としてのイベント、観光まちづくり型のイベントは、いかに持続するのかに意義がある。小さなビジネスでも、地域の中から新しい活動が生まれて、どれだけ広がり継続するかが大事です。双方の考えは対立しているようで、両方重要で響き合うところもあると思いますが。

宮本 堺屋先生は、強烈な突破力や展開力がある天才肌の方なので、常人にはなかなか付いていけず怒られることも…(笑)。堺屋先生が「中国市場は大事だ!」と日本の企業を口説いて、上海万博に日本産業館を出展されたモチベーションとパッションは、我々の活動との共通点があるかもしれないですね。イギリスでは1980年代からCIA(コミュニティ・インタレスト・アクト)という、地域社会に利益をもたらす会社に関して、税制や融資の優遇措置によって成長を支援している。日本でも経済産業省でコミュニティビジネスやソーシャルビジネスに取り組んでいますが、税制まで突っ込んだ議論にはなっていません。地域の産業を育てて、そこから税収を得ようという発想です。我々の活動が今後どんどん成長して収益を生み出せば、それは新しい財産になるわけです。1970年の日本に万博が効果的だったように、今の時代には何が有効なのかを考えることが重要だと思います。

バランス感覚が求められる 自立継続と社会貢献の精神

長谷川 規模は小さいですが、「かなざわ・まち博」も多くの地元企業に参加していただいています。公式ガイドブックには一連の企業名が書いてありますが、我々は企業市民と呼んでいます。企業でも市民の一員である。金沢市に会社や支店を展開している以上、それは市民と同じなんです。それで公式ガイドブックがつかれる。各パビリオンのイラストマップは、金沢市内の美大生が描いています。何かやる時には、その街にある企業や人が一緒に動くということが、イベントを成功させるために大切なことだと感じています。

オダギリ 「大阪旅めがね」でも多くの企業の応援をいただいています。色々な企業とタイアップしたツアーも行っていますが、少しビジネス的になり過ぎて、地域の協力者やエリアクルーなど、大阪に対する想いで動いてくれている人とのバランスが非常に難しくて…。しかし、それがとても大切なことだとも感じています。

宮本 それは、事業ですから儲けてもいいと思いますよ。儲けたお金をどう使うかを明確にすれば、協力者の皆さんにも説明ができるのではないのでしょうか。

橋爪 事業化は、財源確保と言いますか運営の手腕が重要ですね。立ち上げ時は公的なサポートもありますが、後は自力で頑張らなくてはならない。宮本先生、愛媛でも上手く継続できたグループと継続できなかったグループがあるかと思いますが。

宮本 新しいグループもやめたグループもありますが、全体数は2004年の83グループから115グループに増えています。地域エージェントもでき、行政のバックアップもありますが、それぞれが自立しています。三重県で今、30代の若者と一緒に「ソーシャル・レジャー」という新しい活動を構築しています。楽しみながら社会貢献活動する、その担い手を増やす運動を起こしています。彼らを大きく動かして、お金も動かして、そのお金をまた次の社会的な事業に投入する。そのエネルギーが、非常に面白いと思う。どんどん儲かり社会投資するビジョンができれば、無償の協力者のためにも素晴らしいことだと思います。



オダギリ サトシ (おだぎり さとし)
「大阪旅めがね」プロデューサー

Panelist

(株)インブリージョン ツーリズムプロデューサー。1975年上町台地生まれ。大手旅行代理店の着地型観光商品の開発のほか、大阪、滋賀、兵庫、和歌山など、関西圏を中心に観光集客アドバイザーを務める。

日本初の都市型着地観光ツアー「大阪旅めがね」のプロデューサーとしてプログラムの開発、案内人(エリアクルー)の育成、販売など全てに携わる。

長谷川 失敗事例などもありまして、金沢の成功例を見て、同じような形で能登も始めましたが、あまり上手くいっていないようです。その大きな原因は、行政が関与する部分が多いため、予算も含めた平等性と言いますか、金太郎飴のようにどこも一緒にしなければならない。それでは上手いことはいかないですね。地域で競争をして、自分たちがやらなければ良いものはできないと思います。

地域イベントを通じて 子供たちの地元への知識を深める

宮本 先程、長谷川先生から教科書の話がありましたが、それは教育の一環としてお金には換算できない価値があると思います。しかし、それを堺屋先生流に言うと、さらに爆発させる、大きなものに成長させることに、知恵を求められている気がしますね。

長谷川 結局、地域を活性化するのは人です。そうすると、やはり子供の時から地域への理解を深めることが大切です。「まち博教科書」では、金沢の街の暮らし、金沢らしい遊びや産業、街の歴史などを紹介しています。また、様々なビルの高いところから撮影した街並みを通して、街の構造も解説しています。教科書の最後には、感想文の用紙を付けて、子供たちに提出してもらう。それをまた次に活かす。やがて、この子供たちが街づくりをする人材になっていく流れを「かなざわ・まち博」から始めています。

橋爪 私も、京都市の観光政策に関わっていて、教育分野との連携は大事だと考えています。京都市の子供たちは日本で唯一修学旅行に行かない。しかも、春と秋のトップシーズンは、京都の観光地は大変な混雑です。京都の良さを何とか京都の子供たちに学んで欲しいという願いから、市長に「学校教育の中に観光教育を取り入れてください」と提案し、ビジョンに入れてもらいました。従来の郷土史には、外から来た人にどう伝えるのかが考えられていません。京都の良さを伝える視点から学べる教科書を、ご検討いただいています。



橋爪 紳也 (はしづめ しんや)
イベント学会副会長

Moderator

1960年 大阪市生まれ。

2006年 大阪市立大学都市研究プラザ教授・大阪市立大学院文化研究科教授。2008年 大阪府立大学特別教授、同大学観光産業戦略研究所長、大阪市立大学都市研究プラザ特任教授、大阪府府政アドバイザー就任。2009年「水都大阪2009」プロデューサー。水辺を活かした街づくりに関心を持つ橋下徹大阪府知事のもとで政策アドバイザーに就任。2010年 上海万博大阪館プロデューサー。

主な著書は、「モダニズムのニッポン」角川選書(2006年)、「ゆく都市くる都市」毎日新聞社(2007年)、「増補 明治の迷宮都市 東京・大阪の遊楽空間」ちくま文芸文庫(2008年)等多数。

宮本 地域には色々な神話や説話、言い伝えなどがあり、古老の人たちは知っていても子供たちは知らない。それを、絵の上手い学生たちの手で絵本にして、子供たちに伝えていく。何百冊もつくって、シリーズ化して広めていく活動を、三重県の民間スキームを活用して取り組む計画です。地域住民がアーカイブ化することで、地域との絆も深まりますし、新しい交流も広がります。それを地域の中ではなく、外部の人が商品として扱うと、オダギリさんのおっしゃる「大阪と言えばアレやな」というイメージに固まってしまうのかもしれないですね。

長谷川 イメージと言えば「長崎さるく博」は「日本で初めてのまち歩き博覧会」というキャッチフレーズですが、開催は2006年です。しかも、開催の前年と前々年には「かなざわ・まち博」に視察に来ていて「日本で初めて…」というのは、ちょっとおかしい。どうも腑に落ちない(笑)。宮本さんの「えひめ町並み博」がイベント大賞を受賞した際も、内容を拝見すると町並みを見るイベントとしては、金沢の方が早い。皆さん考え方の基本は一緒だということですが、今日はぜひこの場を借りて申し上げたい。「かなざわ・まち博」は2000年からです。プレは1999年、企画は1998年から、20世紀からやっています(笑)。

宮本 ぜひ金沢だけでなく、外の人にも来てもらえるイベントにしていきたいと思います(笑)。

* * *

橋爪 それでは盛り上がりましたところで、最後にイベント学、イベント学会への期待をお願いします。

宮本 イベント学会は今年で11周年になりましたが、新しい時代をリードするような学説や意見など、新たなモデルを世に広めていく学会になって欲しいと思います。

長谷川 学問体系として、イベントとは?ということを明確にする必要があると思います。もう一つ、イベントは、グローバルなものから村の小さな祭りまで、非常に幅広い。きちんと体系立てたものを学会の中で研究していただきたいと思います。

オダギリ イベント学会に何かを期待するなど大それた意見はありませんが、ご来場の皆様にお願いがございませす。この後「大阪旅めがね」のエリアクルーが懇親パーティの会場まで70分間かけてご案内しようと、後ろで旗を振ってスタンバイしています。無料にてご参加いただけますので、ぜひどうぞ。宣伝ですみません(笑)。

橋爪 ぜひご参加いただきたいと思います。実は、宮本先生と長谷川先生は初対面で、全国各地で活躍しているプロデューサーの方々が会合う機会が無いということを痛感しました。イベント学会には、交流の場を提供してくことも大事な活動であると改めて感じました。皆さん今日はありがとうございました。〈敬称略〉

大阪まち歩き

シンポジウム終了後、交流パーティまでの時間を利用して行った大阪まち歩き。シンポジウムにご登場いただいた大阪旅めがねのご協力で「中之島境界コース」(文化とビジネス)「北船場境界コース」(近代建築)の2コースを体験。



交流パーティ

中之島セントラルタワーにて行った交流パーティには、シンポジウムのパネリストや、大勢の法人会員や個人会員の皆様、また新聞・テレビ等のメディア各社の皆様にもお集まりいただき、お互いの親睦を深める交流の場となりました。また、ボランティア出演者によるエンターテインメントなど楽しいコンテンツも取り入れ、賑やかなパーティとなりました。



「橋爪大会実行委員長のご尽力で、大変楽しい大会を開催することができた。またご出演いただいた先生方、大阪市の後援、ご協力いただいた国立民族学博物館、千里文化財団、日本万国博記念機構、メディア各社のご支援、そして運営に携わる大勢のボランティアスタッフの皆さんに、心より感謝を申し上げたい」と開会の挨拶を述べる成田純治理事長。



乾杯の挨拶を述べる
川本直彦副会長。

堺屋太一会長より、ご来場への感謝の言葉とともに上海万博の近況報告も。



来場客と談笑する堺屋会長と成田理事長。



鮮やかなマジックを披露したマジックアーティストの
ジョニー・けんさん。



“似顔絵LIVE”にご協力いただいた田畑伴和さん(中)と村岡ケンイチさん(右)。

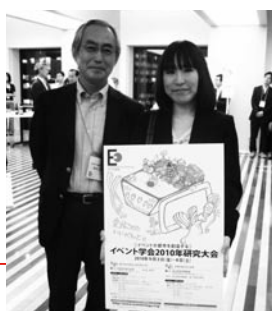


出来上がった似顔絵はそのままプレゼント。

言葉の文化をご紹介いただいた語り部の富田松鶴さん。



橋爪実行委員長による“大阪流”中締めで賑やかに閉会。



研究大会のキービジュアルをデザインした、京都嵯峨芸術大学2回生の坂井結衣さん。同大学教授の桑田政美会員のゼミ生によるコンペで選ばれた作品。



成田理事長と記念撮影をするボランティアスタッフ。

9月4日(土)

《万博のあゆみと未来》

研究大会2日目の9月4日(土)は、会場を万博公園内の国立民族学博物館に移し、《万博のあゆみと未来》をサブテーマに、今年40周年を迎えた大阪万博を記念する講演とシンポジウム、さらにイベント学会会員による口頭発表を行いました。

特別講演とシンポジウムの会場となった講堂では、国立民族学博物館の田村克己副館長の「歓迎の言葉」に始まり、
「本館を創設いたしました梅棹忠夫先生が、この7月に亡くなりました。その梅棹先生が万博の跡地で、イベントという動的な運動体を、国立民族学博物館という一つの文化装置を定着させました。まさにイベントの可能性の一つを、身を以て示したものであります。今年この大会が当館で開かれますことは、万博の時の遺伝子が、今なおどこかで生きている証だと思えます。また、梅棹先生の遺志を我々が受け継ぐ重要性を改めて感じた次第であります」

とのメッセージをいただきました。続いて、橋爪紳也副会長による特別講演「70年万博の遺伝子」～イベントの進歩と調和～では、大阪万博開催の際に(株)電通



が制作した貴重な記録映像を紹介。自身の70年当時のスナップ写真も披露しながら、

「我々の内にある70年万博の遺伝子を伝え残していくということと同時に、70年万博がその後の世界に残してきたことを、もう一度評価するべきだと思います」

と熱く語りました。さらに、大阪万博から上海万博までの流れ、上海万博の会場の様子などを解説。講演の最後には、

「上海万博の関係者は、既にポスト万博の在り方を考え始め、大阪の経験を知りたがっています。私のところに話を聞きに来た関係者とは、上海と大阪の経験を共有するような場をつくろうという話になりました。我々の70年万博の遺伝子に加えて、今度は上海万博の遺伝子が、若い世代や専門家を動かし始めるわけです。我々の70年万博の遺伝子と彼らの遺伝子をいかに響き合わせながら、これからのイベントを考え実践していくのかも大事な視点だと申し上げたいと思います」

と締め括るとともに、

「この後のシンポジウムでは、70年万博に影響を受けて人生が変わった皆さんが登場いたしますので、よりリアルな万博の話をうかがえると思います」

とのコメントとともに大会は最終のコンテンツであるシンポジウムへと続きました。



「歓迎の言葉」をいただいた国立民族学博物館の田村克己副館長。

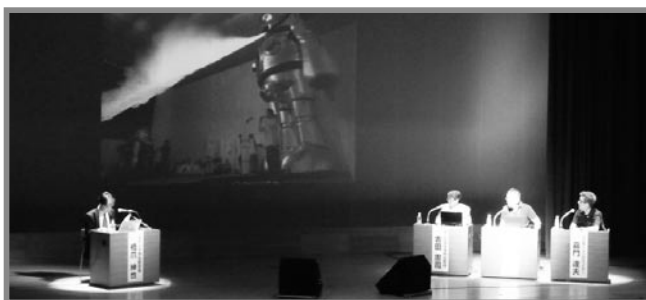
「昨日の交流パーティには多種多様な方が出席していて、最初は共通のカルチャーが見られず雰囲気を掴みかねていましたが、だんだん分かって参りました。おそらくこれがイベントの、イベント学会の性格そのものである。他の学会のように一つのカラーに納まらない多様性を感じました」



司会を務めた近畿大学の井上浩史郎さん。

■■■ シンポジウム ■■■

~EXPOの文化遺伝子ミームは今?~



モデレーター

橋爪 紳也 イベント学会副会長

パネリスト

吉田 憲司 国立民族学博物館教授

嘉門 達夫 シンガーソングライター

ヤノベ ケンジ 現代美術作家

橋爪 最初に3名のパネリストから、プレゼンテーションをお願いしておりますので宜しくお願いします。

日本の民族学に大きな影響を残した 岡本太郎と太陽の塔

吉田 それでは、万博と民博のつながりを振り返りつつ、現在の文化人類学、民族学、民族学博物館が、万博の遺伝子をどのように受け継いでいるのかお話ししたいと思います。

民博の開館は1977年ですが、万博の期間中に岡本太郎が設計した太陽の塔の地下に展示した、世界中の民族資料を一つの核として誕生しました。そのアイデアは岡本によるもので、絵画の勉強の傍らパリ大学で哲学と民族学を学んでいた1937年にパリ万博に出会い、それを機に整備されたトロカデロの人類博物館「Musée de l'Homme」に足繁く通っていました。それ以来「日本にも本格的な民族学博物館をつくるべきだ」と考えていました。大阪万博テーマ館のチーフプロデューサーに就任した岡本は、世界の民族の資料を集め、人類の過去から現在、未来を提示するプランを立てた。そして当時、京都大学におられた当館の初代の館長の梅棹忠夫先生、東大におられた泉靖一先生を中心に民族資料の収集団「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」、通称EEMが組織されました。総勢20人のメンバーが1968年から1969年にかけて世界各地を飛び回り、2200点余りの民族資料を収集しました。それが、民博に収められ、収集に関わった梅棹先生、石毛直道先生をはじめ研究者

の多くがここに職を得ています。民族資料を集め始める段階で、岡本は民族学博物館をつくる構想を持っていて、当時の関係者の間では暗黙の了解だったようです。

太陽の塔とテーマ館が提唱した 人間の過去・現代・未来のつながり

太陽の塔の地下は「知恵」「出会い」「祈り」の3つのコーナーで構成され、最も重要な空間と位置付けた「祈り」の世界に、岡本は4つ目の「地底の太陽」を配置し、その空間を仮面や神像で埋め尽くしました。残念ながら、「地底の太陽」は未だに行方不明になっています。岡本はこの空間で、人類の根源を表現しようとしていました。「太陽の塔は根源から吹き上げて未来に向かう生命力の象徴である」と岡本の言葉に残るように、中に生命の樹がそそり立ち、単細胞、アメーバーから人類までの進化の歴史が凝縮されていました。現代から、地下の過去の世界に遡って根源を確認した後、未来を巡って再び現代に帰る。極めて明快で一貫した原理、人類学的な論理だと思います。岡本は、太陽の塔を「原始と現代を直結させたようなベラボーな神像」とも形容しています。太陽の塔のように顔を持つ造形は、1950年代からの作品に登場します。これは、縄文の美を発見した時期とほぼ一致しています。太陽の塔が縄文とつながり、現代の世界の民族とエネルギーがどこかでつながっている。太陽の塔とテーマ館は、岡本の世界観の具体化であると同時に、岡本自身の民族学の知識が梅棹先生らの研究者の知識に裏付けられ、人類学、民族学の一つの宣言になったわけです。

大阪万博の意志を受け継ぐ 民博の歩み

当館では、一昨年からの常設展示の全面的なリニューアルを始め、6年程かけて全体を新しくする計画です。その上で、私たちは次のようなコンセプトを掲げています。





吉田 憲司 (よしだ けんじ)
国立民族学博物館教授

Panelist

京都大学、大阪大学大学院を経て、1984年 ザンビア大学アフリカ研究所にて、ザンビアのチェワ社会における仮面結社と憑霊現象に関するフィールドワークに従事。1988年 国立民族学博物館に着任。1991年から2年間大英博物館に客員研究員として滞在し、広くコレクションや博物館の歴史や役割に関心を持つ。今後数年間はアフリカをはじめ、アイヌ文化、アジア、ヨーロッパを対象に、長年の研究の成果を問うかたちの展示を民博の内外で計画。近年アフリカで高まる「アフリカ人自身によるアフリカ文化史／美術史の構築」のサポートにも携わり、その成果は日本とアフリカ諸国の博物館で公開を予定。2006年 国立民族学博物館文化資源研究センター教授 同センター長に就任。

- ・地域の特長を示すと同時に、その地域と世界、その地域と日本とのつながりを示すような展示
- ・伝統と現代、あるいは近代化以前と以後という二分法ではなく、歴史的見解の結果としての現代を示す展示
- ・今を生きる人々の姿が浮かび上がって、同時代人としての共感を育む展示
- ・展示される側と展示する側の共同作業による展示

例えば、昨年3月にオープンしたアフリカ展示は、アフリカの8カ国の研究者、博物館関係者との共同作業でつくり上げたものです。万博当時は、研究者も伝統的なものこそ本物の民族文化だと考え、民博の展示も同様でした。しかし、世界の民族文化は、常に世界とつながりを持ちながら変化してきました。現代の人類学、民族学、そして民族学博物館は、同時代の人の認識と共感を持つことが一つの核心になっています。これは70年万博のコンセプトの中で、既にその芽が宿っていたように思います。岡本の言葉にある「人間本来の多様さ、それにも関わらず共に今を生きている共感を謳い上げる」というその姿勢そのものです。

多くの方は、民博は万博の跡地にある博物館という認識だと思います。しかし、太陽の塔の地下コレクションを所蔵している「モノのつながり」、当時の関係者が研究活動に携わった「人のつながり」、太陽の塔に結実したアイデアを人類学、民族学の認識の基礎にしていた「思想の上でのつながり」という点で、万博と民博とは同じDNAが共有され、そのDNAを受け継ぎながら、現代の人類学、民族学、民族学博物館は、その理念に忠実に歩んでいる。まさに「EXPOの文化遺伝子ミームは今？」だと思います。

橋爪 ありがとうございます。私も民博は万博そのものだと思います。ではヤノベさん、お願いいたします。

未来の廃墟で見たものが モノづくりの原体験に

ヤノベ 僕は、現代美術作家を名乗って、美術館や、街中でのアートのイベントや展覧会で作品を発表しています。僕の作品は大阪万博の影響がかなり大きいですが、開催中の記憶はあまりありません。生まれは1965年で、

子連れでは大変なので比較的空いている夜に来たことは覚えています。当時は大阪の南の方に住んでいて、1971年に茨木市に転居してきました。実は高校も嘉門さんと同じ学校の出身です。住まいはここから自転車で10分くらいのところで、万博の跡地は子供の格好の遊び場になっていた。よく覚えているのは、日本館が鉄球で潰される様や、お祭り広場の奥に放置されていたロボットのデメ。操縦席もあって、いかにも動きそうで、実際はどんな動きをしていたのか空想をめぐらすような存在で、ドキドキワクワクして探検ごっこをしていました。その時に肌で感じたのは未来の廃墟。私の大阪万博の記憶は、未来の廃墟との遭遇でした。万博の廃墟とデメとの出会いは僕の作品の根源であり、そこからモノづくりのきっかけを得た少年は、その後いったいどうなったか？高校時代には、仮面ライダーやバルタン星人のコスプレなどに熱中していました(笑)。恥ずかしいので家の中で写真を撮って楽しんで、最終的には現在の職業に就くのですが、アーティストになってもまだ僕はコスプレをしていました。しかしその場所は自宅ではなく、チェルノブイリの入口で、実際に放射能防護服を着ました。原子力の未来を信じていた街が、事故で廃墟になった。この街でモノづくりへの原体験である、大阪万博の未来の廃墟に再び出会えるのではないかと思います。1997年に訪問しました。そして、未来を生き残るための装置、生活周辺をつくる形で作品を作り続けています。

万博会場跡地の幻影を再構築した 作品展「MEGALOMANIA」

僕はこの防護スーツを来て、2003年にこの聖地に戻ってきました。当時は中之島に移転した国立国際美術館がここに存在しました。大阪万博の時に建てられた美術館が、老朽化のために取り壊される最後の年に、奇跡的なタイミングで個展をしてみないかと。僕は万博会場跡地で見た廃墟の幻影を再構成しようと、放射能防護服、放射能を避けるためのクルマ、ノアの箱船のような列車など、服やクルマ、家、列車、生活必需品、都市を構成する要素として長年つくってきたものを並べ、自



分のつくった妄想都市を構成しようと思いました。このときの映像をご用意しました。万博会場全体を利用したプロジェクトにしたいくて、太陽の塔なども登場しています。

—映像「MEGALOMANIA」上映—

昨年、橋爪先生のプロデュースした「水都大阪2009」にも参加しましたが、それは後ほどご説明したいと思います。

橋爪 では嘉門達夫さん、お願いいたします。

バッジ集めに熱中した 大阪万博と親友との物語

嘉門 僕は、茨木市で生まれ育ち、大阪万博は6年生のとき。橋爪先生は4年生で19回とのことですが、僕は21回です(笑)。当然外国人にサインをもらいましたし、初めて動く外国人を近くで見て、皮膚の色や体臭まで国によって違うことに心をときめかせていました。スタンプ集めも流行りましたが、僕たちはパビリオンのバッジ集めに夢中で、64種類集めて学校で3位でした。1位だったのは101種類集めた高倉というヤツです。高倉は、幼稚園からの同級生で、小学校2年の時にお楽しみ会で漫才をやったのが初めて人前で笑いをとった原体験です。この高倉は、2006年に肺ガンで亡くなりました。その年の春先に電話で余命3ヵ月と聞き、急いで見舞いに帰ってきたら、まず僕の顔を見て「達夫、万博のバッジどないしよう」と言ったんです(笑)。高倉とは、愛・地球博にも二人で出掛けました。僕たちは46歳になっていましたが、NHKの熱中時代という番組の企画で、35年ぶりにバッジを集めました。オープニングから2日間で、僕が40数個で高倉が30数個。その後も愛・地球博の開催期間中に唄いに行く仕事があると、高倉は用もないのに付いてきて、最終的に僕は230個ぐらい集めました。我が家の廊下には、僕の大阪万博と愛・地球博のバッジと一緒に、形見としてもらった高倉のバッジを並べて飾っています。ヤツは死ぬ前に「俺の葬式も万博みたいに面白くしてくれ」と言いまして、葬式では「今日は皆さんようこそいらっしやいました。ちょっと早かったですが行ってきますわ」と本人のメッセージ入のビデオを流しました。その思い出は「た・か・く・ら」という本にして2007年に出版しました。よろしければご一読いただきたいと思います。

40年前の大阪思い起こす 上海の光景と中国の活気

今、開催中の上海万博には何としてでも参加したくて、何のオファーも無いのに建設中に4回自腹で下見に行きました。夢としては、僕の唄を中国語に訳して、中国の皆さんを笑わせたい。着々と準備を進め、歌詞を翻訳したり中国語も勉強しました。そのうちにNHKから5月1日のオープニングの日に、中継のオファーがあり、「唄いま

しょうか?」と聞きましたら「バッジを集めてください」と(笑)。あの日は2〜3時間の中継で11個ぐらい集めました。続いて、日本産業館からステージのオファーがあり「鼻から牛乳〜」は中国語に訳すと分かりにくいので、中国語でオー・マイ・ガーのような言葉にして、小籠包を食べたら中身がいちごジャムだった、と唄うと中国の人がワーツと喜ぶ。片言ですが何とか伝えるようにやってきました。7月からは、堺屋先生から声をかけていただき、日本産業館応援団長として活動しています。今回は9月30日に、日本産業館JALステージでライブをしに行きます。片言ながら中国語で唄うと中国の人が笑ってくれて、大阪万博の国際交流のような音楽があって笑いがあるムードを自分なりに感じて、ちょっと嬉しかったりします。

もちろんバッジも集めていて、現段階で500種類あります。今日は、黒いジャケットにバッジを全部付けてきましたので、これを着一曲唄いたいと思います。実は5kgぐらいあるんですよ(笑)。大阪、愛知と高倉とバッジ集めを競い合いましたが、ヤツの分まで集めなければいけない。閉幕まであと何回か上海に行きますので、バッジ集めも続く、そんな感じです。

上海は、40年前の大阪と状況が似ていて、みんな嬉しそうに行列に並んでいます。40年前大阪もこんなだったなあと。今、少し日本は元気が無いと中国にいると感じます。中国の人たちは、今日よりも明日、明日よりも明後日の方が自分たちの暮らしが良くなることを確信して、生き生きとした表情をしている。40年前僕らもそうだったなあと。それでは「明るい未来」という、高度成長期の時代を唄った曲を聴いてください。

—「明るい未来」生演奏—

橋爪 ありがとうございます。

ここで終わりそうな盛り上がり

ですが、引き続き皆さんからお話をお願いします。

吉田 上海万博は、建物に関してはあまり驚きが無く、むしろ70年万博の方が、驚いた印象が強く残っています。技術についても、70年万博では携帯電話、電気自動車、電動自転車、サンヨーが開発したスーパー・ソニック・バスは、今では医療現場で応用されていたり、温水洗浄便座の発想にもなっているのでは。橋爪先生のおっしゃるように、この時に近未来が見えた。上海万博では、未来の展望というものはあまり感じなかった。

無かったものを可視化し 未来を描いた大阪万博

橋爪 私も同感です。70年万博は、今まで無かったものを、形にして見せたいという強い想いが感じられます。アイデアを可視化する意識が強かった。上海万博は、既に世



界中にあるものを掻き集めた感じですね。大阪では、まさに嘉門さんの唄のように、明るい未来を描きたかったんですね。上海万博は勢いで「行くぞ!」という印象です。

嘉門 僕もそう思います。大阪万博は、文明の進化に関しては意義が大きかったと。動く歩道や空中ピッフェなど、今まで無かった未来的なものが溢れていましたね。

橋爪 上海ではどんな印象をお持ちになりましたか？

嘉門 日本産業館では、抽選で当たると世界一のトイレと言われるウォシュレット完備の最新のトイレを実際にご利用できますが、中国の田舎から来た人にとって、もの凄く画期的なことですよ。あまり文明に触れていなかった僕らも、大阪万博では全てが画期的だった。石油館の映像は、飛び出す椅子も揺れる。僕らは見慣れていても、中国の人にとっては驚くべきことだと思います。

橋爪 ヤノベさんはいかがでしょう。

大阪万博で繰り広げられた 大人同士の大相撲

ヤノベ 僕は吉田先生の岡本太郎さんのお話が印象的でした。ある意味で未来を見つめながら、その当時の体制に反発して色々なことを見立てていった巨人ですよ。大阪万博以降の万博に、個人としてそこまで牽引力のある人物が存在したのかが気になりますね。太郎さんが丹下さんの「大屋根をプチ破れ!」と言って、太陽の塔をプチ建てた。怪獣同志の対決をリアルに見ている光景だったと思います(笑)。大人同士の相撲の取り合いが、まさに大阪万博だったのではないかと思います。それは、表現者になった自分が目指すべきところだと感じますね。

橋爪 来年は、岡本太郎さんの生誕100年で、日本が元気の無い状況だからこそ、もう一度「太郎」が注目される時のような気がします。

「人類」を全面に出した 大阪万博の特異性

吉田 大阪と上海との違いは、都市がテーマで人類や地球が前に出ていない。中国国家館が中心部にあり、別のところにあるテーマ館がシンボルになっていない。橋爪先生から、他の建物には中国国家館より高さを低くする制限があるとお聞きして、実験的な建物が少ないのも納得できました。つまり、上海万博は中華思想が強く表された博覧会であり、しかし批判ではなくそもそも万博は国威発揚の場であったわけです。むしろ中華思想的な構成の方が歴史的にも一般的で、逆に人類をあれほど全面に出した大阪万博は、その歴史の中では異例だと感じました。一つには、戦争が終わって25年という背景、もう一つはヤノベさんがおっしゃるように、岡本太郎という人間が当初のプランを全部ひっくり返した。彼の持つ人類

学的な認識がそうさせたのだと思います。

橋爪 日本は戦前にも万国博覧会を計画して、情報の集積や海外の博覧会を調査していました。しかし戦争でその人材が最前線からいなくなり、70年万博の準備はゼロから考えざるを得ない状況だったと思います。そのときに、当時の50～60代の人たちが「我々は分らないから若い人たちが好きなことをやれ」と言ったと、堺屋先生や小松左京先生にそのようなニュアンスの話をうかがいました。堺屋先生は30代、小松先生も40代前半の若い世代が次の日本を背負うべく登用され、その後も最前線を背負ってきました。今は、再び世代交代が求められている時期だと思います。上海万博を体験した中国の若い世代は、次に凄い仕事をしそうな予感がします。博覧会の遺伝子は、社会の中、人の中にとどまっていくところがある。ヤノベさんのおっしゃる「怪獣対決」のような場を積極的につくる必要があると思います。ヤノベさんには「水都大阪2009」のお話をお願いします。

水の都に花開いた大阪万博の遺伝子

ヤノベ それでは映像を見ながらご説明します。

—「水都大阪2009」映像上映—

「水都大阪2009」は、簡単に言えば行政が主導で行ったアートプロジェクトです。大勢のアーティストを海外からも招き、大阪自体が水を利用したミュージアムとなる構想でした。90億円ほどの予算で計画が決定していたところに、橋下知事が現われてひっくり返った(笑)。予算もアート関係者も大幅に減り、これではできないと思う反面、大阪をアートが分らないままでもいいのか、意識を変えないと、次のステップに進めないという葛藤がありました。計画自体も市民的なものになりましたが、中之島地区を中心に色々な作品を置きました。市役所の玄関ホールには火を噴くロボット「ジャイアントドラゴン」を置きました。残念ながら火を噴くことはできませんでしたが。中央図書館では自分の作品の映画館にしたり、名村造船所跡地にも大きな作品を置いて、水を利用したアート作品を



嘉門 達夫 (かもん たつお)
シンガーソングライター

Panelist

1959年大阪府茨木市生まれ。フォークソングとラジオの深夜放送、そして大阪万博に多大な影響を受け育つ。高校在学中笑福亭鶴光師匠に入門、のちに破門。その後、ライブ活動を始める。「嘉門達夫」の名はサザンオールスターズ桑田佳祐氏の命名。1983年「ヤンキーの兄ちゃんのうた」でデビュー。以降、「小市民」「鼻から牛乳」「替え唄メドレーシリーズ」などヒット曲多数。1992年NHK紅白歌合戦出場。最新CD「笑い」のさくら咲く〜ギャグセレクション〜、「恋」のさくら咲く〜恋愛セレクション〜好評発売中。10月3日(日)umeda AKASOにてライブを行う。「生涯現役」と語りながら疾走中!! 現在のテーマはフットワークの軽い「貴族のない50代」だという。2010年、上海万博「日本産業館応援団長」に就任し、10月末の閉幕までライブ活動を通じて会場を盛り上げている。

<http://www.sakurasaku-office.co.jp>



ヤノベ ケンジ (やのべ けんじ)
現代美術作家

Panelist

1965年 大阪府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1990年 デビュー。「サバイバル」をテーマに終末的な環境下で使用するための機械彫刻シリーズを制作。幼少期に自宅近くの大阪万博跡地で見た、近未来的なパビリオンの残骸、巨大ロボット・デメが放置されたお祭り広場の光景に「近未来の廃墟」を感じたという原体験が作品に大きな影響を与えている。1994年 ベルリンに移住して精力的に制作・発表し国際的な注目を浴びる。展覧会に1999年「日本ゼロ年」（水戸芸術館）、2003年個展「メガロマニア」（国立国際美術館）、2005年「子供都市—虹の要塞—」（金沢21世紀美術館）、2005年個展「キンダガルトン」（豊田市美術館）、2007年個展「トラやんの世界」（霧島アートの森）ほか多数。現在大阪府在住。

つくりました。大阪の街に巨大な怪獣が出現する!と「ラッキードラゴン」という船をつくりました。火を噴いたり、水を噴いたりできる船で、予算が縮小されたため沢山の人の馬鹿馬鹿しい作品づくりに協力していただき、まさに大阪の街でつくりあげたものです。美術館などは敷居が高いと思う人も、街中を「ラッキードラゴン」が走っていくのを見て、アートの可能性を感じたり、そこに発しているメッセージを感じてもらえればと思います。ちなみに「ラッキードラゴン」は被爆した「第五福竜丸」から名前をいただいています。その発想は、太陽の塔は核の象徴でもあると感じたことです。太郎さんは、太陽の塔と同じ時期に、明日の神話という巨大な壁画に原爆の爆発を描いています。やはり、僕自身も大阪万博の遺伝子をずっと持ちながら、作品づくりをしていると思います。

橋下知事も「水都大阪2009」を通じてアートへの意識が変化したような気がします。最終日に「大阪文化賞」をもらいまして、今年は大阪の街中に沢山のアート作品を置くためにコンテストを実施することになりました。僕も応募したいと思っていたら、つくるのは若い人たちで、僕は審査員に回されてしまいました(笑)。

万博の経験がもたらしたものとは

橋爪 橋下知事の現代美術やアートに関する考え方を私なりの解釈でご説明すると、公金で有名な作家を使い高いお金を払って進める文化施策では、市民にはよく分らない。新進の若い作家を後押しして、チャンスを与えるのが公共の仕事であろう。この点を強くおっしゃっている。すべての分野に於いて、若い者が果敢にチャレンジできる街にしないと元気がでないということです。

上海万博の関係者は、既にこれからを考えて、我々の大阪万博後の経験を知りたがっています。日本のイベント関係の企業の方は、経験を踏まえば地方博覧会ブームが中国では起るという見解です。中国では博覧会がどのようなものか、今ひとつ分っていなかった。今回リアルな博覧会を体験したことで、これを各都市で展開する動きが始まると予測されています。70年万博的な博覧会と

いう祭りを日本中が求めて地方博ブームが起ったように、中国も同じ現象が起る気がしています。70年万博的なものを考える時に、その後に何が起ったかを考える重要性を、私は今日改めて感じました。では最後に、今日の感想とイベント学会に向けたメッセージをお願いします。

人と社会に宿り続ける EXPOの文化遺伝子

吉田 よく万博の時代はもう終わったと言われます。しかし、どんな社会にも祭りが存在することを見ても、70年万博の祭りという単純なコンセプトは、万博の中に残っていくと改めて感じました。この民博は、大阪万博が恒久的な文化装置を生み出した事例であり、イベントとは新しい文化を生み出す起爆剤だと思います。そういったチカラを持つイベントを、ぜひイベント学会を通じて探求していただきたいと希望します。

ヤノベ 一過性で経済効果を生むものというイベントに対する意識は、もう機能しないと思っています。「水都大阪2009」についても、ほとんど人のチカラ、ボランティア精神溢れる人のチカラで、旧来の祭りのようなものをつくりあげて実現しました。それが今後のイベントや文化を創造する上での宝になるような気がします。それから、イベント学会の方で、次のプランを考えている方が大勢おられると思います。僕は沢山のネタをつくっておりますので、ぜひこれを機会にお待ちしております(笑)。

嘉門 皆さん、イベントをやっていきましょうね。僕はかつて三池炭坑のあった熊本県の荒尾市の観光大使をしています。かつてそこには、大勢の人がひしめきあって暮らしていた。悲しいことも、うれしいこともいっぱいあった。でも今はシーンとしていて、万博の跡地のような広大な敷地が広がっています。行く行くは、炭坑のあった街などで、万博を開きたい。あそこには遊園地もあるし、土地もある。皆さんのアイデアを借りて、イベントを我々の手で実現して、地域やこの国に元気を与える。当然そこには、音楽があつて笑いがある。そんな夢を実現するためにも、今回はイベント学会に参加させていただき非常に良かったなと思います。

橋爪 嘉門さんは「万博になりたい」と言っている(笑)。ぜひ皆さんと、どこかの機会でまた一緒にできればと思います。本日は、最後までありがとうございました。(敬称略)



モデレーター

橋爪 紳也 (はしづめ しんや)
イベント学会副会長

*プロフィールは10頁をご覧ください。

口頭発表

9月4日(土)の午前中に行った口頭発表には11組14名が参加。ビジネスやフィールドワークを通じ、多種多様なイベントに関する研究の成果を報告する場となりました。

2つのセミナー室は大勢の聴講者で賑わった。



第3セミナー室

平家良美・大石祥子 (株)京都総合研究所

古都・京都の文化財と
イベントに関する一考察

京都における文化財を活用したイベントの留意点や、新たなイベント創造の必要性を発表。



中川美穂・伊藤陽祐 京都嵯峨芸術大学

商店街におけるイベント実践報告
「歩いciao! 着物で千ブラ」
～大学生が案内する路地裏散策～

「イベント制作を通じプロデュースワークの難しさや喜びを知ったことも大きな収穫」と体験談を報告。



奥正孝 大阪成蹊短期大学

岸和田だんじり祭りの運営の事例

祭りの歴史や拡大の過程、観光資源としての運営など「だんじり祭り」に関する事例研究を発表。



桑田政美 京都嵯峨芸術大学

ジャパンエキスポが
地域の観光に果たした役割
～世界リゾート博、
南紀熊野体験博を事例として～

イベントを活用した観光振興モデルの構築を目的に研究。和歌山の事例と今後の課題などを発表。



今井雄彦 サクラインターナショナル(株)

韓国で開催される世界大百済典と
奈良県・熊本県のご出展について

「美術品輸送のコストと予算とのバランスが企画提案のポイント」と国外イベント受注の鍵も報告された。



発表の後には質疑応答も行われ聴講者の理解を深めるとともに、発表者への新たな提案など活発な意見が交わされた。

第7セミナー室

石川敦子 (株)乃村工藝社

温故創新「乃村工藝社
博覧会資料COLLECTION」
～イベント資料による
社会貢献の取組み～

自社で保有する膨大な博覧会資料に関して、アーカイブ化の重要性や社会貢献の方向性を発表。



井上浩史郎 近畿大学 猪池雅憲 太成学院大学

ネット社会のイベントに関する一考察
～オフ会参加・開催経験を生かして～

オフ会での出会いや人とのつながりなど、ネットをきっかけにしたリアルなイベントの事例を報告。



猪池雅憲 太成学院大学

地域活性化のおまつりに関する一考察
～「どっぷり、昭和町。」2010に
おける事例研究～

地域住民が自発的に立ち上げたイベントの事例から、地元コミュニティに与えた成果や課題を発表。



貝辻正利 神戸大学大学院 北後明彦 神戸大学

イベント・プロデューサー視点での安全対策責任の考察
～明石世紀越えイベント
「ジャパン・カウントダウン2001」
安全対策分析結果から提起～

参加予測の甘さが招いた事故の事例から、安全対策の考え方や関係者の情報共有の重要性が提起された。



諏訪部裕美 (株)博報堂

エコウォーク活動
(観光地域づくりイベントのオーガ
ナイズと運営の工夫、成果、課題)

「地元の人と歩くこと」により様々な発展性が広がる、エコウォーク活動の成功事例を報告。



横尾俊成 (株)博報堂

「グリーンバード赤坂チーム」の動員力
(地域社会貢献型イベントのオーガ
ナイズと運営の工夫、成果、課題)

楽しく参加する「ごみ拾い」活動から期待する地域活性化や地域リーダー育成の成果を報告。



閉 会 式

大阪市中心公会堂、国立民族学博物館で2日間にわたって開催された2010年研究大会。閉会式では、橋爪紳也大会実行委員長より「2日間、大勢の皆さんにお越しいただき、盛況な研究大会が実施できたと思います。今後は、学会として学術研究の部分もさらに充実させることの重要性を実感しました」との総括があり、すべてのプログラムを終了しました。

最後に、成田純治理事長、森隆一副理事長とともに、実行委員会メンバー、ボランティアスタッフが記念撮影。シンポジウムのパネリストである嘉門達夫さんにもご参加いただき、笑いに満ちた閉会式となりました。



2日間にわたり奮闘していただいた橋爪紳也大会実行委員長。



実行委員・ボランティアの皆さん、お疲れさまでした。

■ イベント学会 2010 年研究大会 実行委員会

委員長：橋爪 紳也

副委員長：間藤 芳樹 桑田 政美

事務局：(株)マッシュ(井上 明子 末谷 彩)



副委員長：間藤芳樹理事



副委員長：桑田政美会員

実行委員・ボランティア

井添 義英	伊東 睦啓	猪池 雅憲	井上 浩史郎	内田 なお子	大西 宏幸	大山 いつ子
岡 達也	小川 未花	沖 佳保里	奥 正孝	小田切 聡	加藤 良子	川口 泰久
岸田 匡平	喜多村 和也	斉藤 由幸	酒井 艶子	阪岡 裕貴	高原 まさ子	末永 奈々
関川 淳	曾我 勇太	田浦 紀子	滝本 真子	田中 知夏子	田邊 栄治	田村 克彦
津吉 良政	寺島 義博	寺沢 奈七子	徳永 俊也	徳永 真一郎	仲底 真由美	中村 勇樹男
西川 博美	橋本 麻衣子	橋本 真人	平須賀 玲子	古久保 栞	平家 良美	朴 載午
政次 哲夫	政次 裕也	松田 涼平	宮木 宗治	宮久 哲実	宮本 貴美子	村尾 初子
室田 一也	矢部 信明	山田 重昭	山田 はるひ	山田 博一	吉原 大介	吉村 昌浩
若見 しのぶ	和田 泉	和田 誠一郎				

(五十音順：敬称略)

撮影協力：田村克彦、寺島義博、和田泉

■ 2010年度助成研究が決まりました。

イベント学会研究助成制度による研究テーマが以下の3件に決まりました。研究成果は研究大会などで発表していただく予定です。

① ウエディングに関する実態調査研究

助成対象者：奥 政孝さん（京都嵯峨芸術大学 非常勤講師）
猪池 雅憲さん（太政学院大学講師）
阪岡 裕貴さん（松竹芸能(株) 大阪イベント事業室）

② 古都・京都における“温故知新”イベントの可能性に関する一考察

助成対象者：平家 良美さん 大石 祥子さん（(株)京都総合研究所）

③ 建物公開イベントに関する、各施設側の意識調査・実態調査

助成対象者：斉藤 理さん（上智大学／慶應義塾大学 非常勤講師）

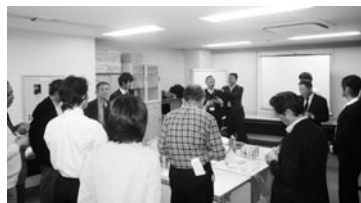
■ 「イベント学会のイベント」にご参加ください。

「就職情報サロン」

（日時）随時開催

（場所）日本イベント産業振興協会会議室

イベント制作会社、空間演出企業、広告代理店などイベントの最前線で活躍する会員企業の社員が、自分の仕事と会社を紹介します。イベント・コミュニケーション関連への就職を志望する学生会員、ビジネスネットワークの充実を目指す会員はぜひご参加ください。



「金曜サロン」

（日時）偶数月の最終金曜日18:30～21:00

（場所）日本イベント産業振興協会会議室

イベントビジネスに関連する様々な分野の皆様とイベント学会会員との情報交流の場として定期的開催されるイベントです。このサロンを通して新しい人的ネットワークが形成され、参加される皆様の生活とビジネスがより充実されることを願っております。

※内容、スケジュールなどの詳細はメールニュースと学会Webでお知らせします。
※メールニュースを受信希望される会員はメールアドレスを事務局までお知らせください。



■ イベント学会入会手続き

1. 入会ご希望の方は、申込書（会員種類別）にご記入の上イベント学会事務局あてで郵送ください。申込書は学会Webからダウンロードするか事務局へご請求ください。
2. 申込者については理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金（初年度のみ・準会員は不要）と年会費を指定の口座にお振込みください。
3. これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、研究大会、イベントなどのご案内をお届けします。

イベント学会会費一覧（2010年4月～2011年3月）

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000	10,000	個人
2) 準会員	なし	2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4) 法人会員	(1口) 100,000	(1口) 100,000	企業、団体などの法人

※法人会員は1口以上

（単位：円）



「イベントロジー」
NO.24/2010.Nov

◎発行人：堺屋太一 ◎編集人：小林政則 ◎発行日：2010年11月
◎発行所：イベント学会事務局 〒102-0082東京都千代田区一番町13（一番町法眼坂ビル3F）
TEL:03-5215-1680 FAX:03-3238-7834 URL: <http://www.eventology.org/>